

四万十町中流域 十和大道地区に残る昔野菜の価値化の試み

浦島 卓也（高知工科大学）馬淵 泰（高知工科大学）

1. 背景

中山間の集落が消滅していく原因のひとつとして集落が正しく評価されておらず、その価値を明確にできていないことに問題があるのではないかと考えた。集落の価値のひとつとして今も集落に残る「昔野菜」について調べてみた。「昔野菜」は「伝統野菜」と同意語である。伝統野菜とは、「その土地で古くから作られてきたもので、採種を繰り返していく中で、その土地の気候風土にあった野菜として確立されてきたもの。地域の食文化とも密接していた。(農林水産省 HP 抜粋)」というものである。その「昔野菜」の中で四万十町中流 十和大道地区に残る「昔野菜」について調べてみた。十和大道地区は65歳以上の人口比が65%のいわゆる“限界集落”である。その十和大道地区の「昔野菜」は地元の方々により代々受け継がれてきている。「しゃえんじり」と呼ばれる家庭菜園で母から娘へと代々受け継がれてきた野菜たちである。ただ現在の野菜は種苗会社のF1種(一代交配種)と呼ばれる種もしくは苗を購入して野菜を作るのが一般的になっている。ただそのような時代でも作り続けられている昔野菜が「なぜ大道地区に残ってきたのか」を明らかにすることによって「昔野菜」の価値を考えたい。

2. 研究目的

本論では、まず生産者にとって「昔野菜」は経済的に見て価値のある作物ではないかと考え、生産者への経済的影響について明らかにすることを試みた。「昔野菜」と「F1種(一代交配種)野菜」とを経済的な側面から考察する。そして消費者にとって「昔野菜」が価値ある野菜であるのかを調べる。また昔野菜作る「昔の農業」とF1種野菜を作る「今の農業」を比較する。このことにより「昔野菜」の価値を明らかにしたいと考える。

3. 研究方法

現在、四万十町中流域 十和大道地区で昔野菜を作り続けている大道加工グループの方々には2017年8月31日に大道中学校(廃校)でインタビューを行った。また先行研究に挙げている四万十町十和でおかみさん市に携わってきた森澤宏夫氏への2017年8月6日に森澤氏製塩施設事務所にてインタビューを行った。

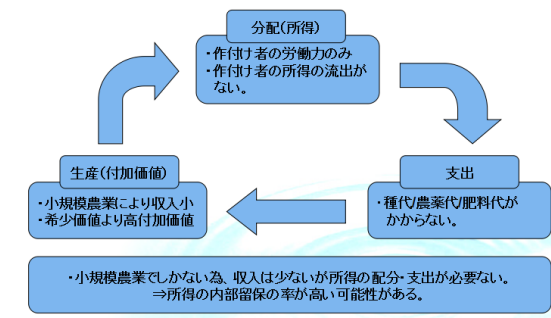
4. 四万十町中流域 大道地区に残る昔野菜の概要

十和大道地区に残る「昔野菜」は大道地区の集落形態が数戸づつ小さく分かれていることにより他の種と交配することなく原種に近い状態を保って来ている数少ない種と考えられる。現在「昔うり」「昔きび」「昔まめ」「昔大根」「昔かぶ」「昔たかな」の6種類の野菜が残ってきている。その他「白いさつまいも」や「もちきび」なども上がっていたがインタビューの結果 不明なところが多くあった為、現在 昔野菜と取り上げている6種類に限定した。

5. 昔野菜とF1種(1代交配種)野菜と経済的比較

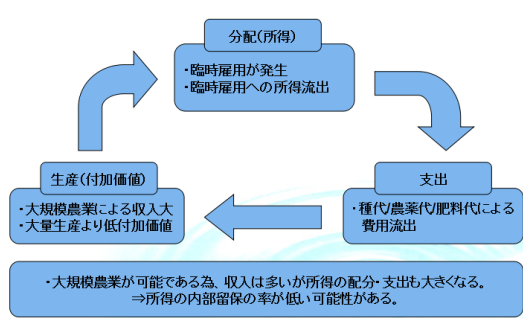
大道加工部グループの方々や森澤氏のヒアリングから「昔野菜」の経済的優位性として「種は自分たちで採る」「種を採ることによって同じ品質の野菜が作り続けることができる」「農薬や肥料に頼らず作れる」「病害虫が発生しても異端児的な種が残る」などがあつた。劣位性としては「一般的な食材としての市場性がない」「形が揃わないので流通性がない」という声があつた。反対に一代交配種であるF1種野菜の経済的優位性としては「形が揃いやすいので流通性がある」「一般化した食材である「農薬・肥料を使うことにより形が均一化した野菜が採れる」などがあつた。劣位性としては「種代が必要」「種を採っても次世代はうまく作れない」「農薬代・肥料代がかかる」「世話がかかる」などの声があつた。インタビューから「昔野菜」としては支出の面ではあまり費用が発生しないが「付加価値」が低いことがわかつた。

大道昔野菜の経済循環モデル



(図 1 参照)。

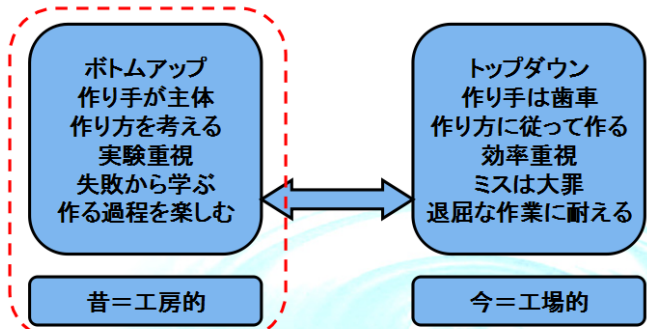
F1種野菜の経済循環モデル



(図 2 参照)。

6. 「昔野菜」から「昔」と「今」の価値比

次に大道加工グループと森澤氏の昔野菜作りと F1 種野菜作りについてのインタビューを行った。大道加工グループの方々からは「作るのが楽しい」「どう育てるかを考える」「他の生産者たちと出来栄などを話し合うのが楽しい」「できた野菜を交換したりする」という話があった。F1 種野菜(一代交配種)を育てる今「農薬や肥料を与えておけばある程度の出来栄の野菜はできる」「野菜づくりに楽しさはない」「形がよいものしか買い取らない」という話があった。インタビューの結果から図 3 をまとめた。



(図 3 参照)

7. 結論と今後の課題

四万十町中流域 十和大道地区に残る「昔野菜」についてインタビューの結果から昔野菜は支出面では優れた作物であるが「市場性がない」ということで作られる規模が小さいことが判った。ただ現在主流の F1 種(一代交配種)による農業に特化すると「種・農薬・肥料」が種苗業者に握られることになり生産者としては経済的優位に立つことが難しいことがわかった。また、F1 種に耐性のない病害虫が発生した場合、全滅してしまうリスクがあることがわかった。「昔野菜」はその土地の病害虫に耐え選び抜かれた種であるので新しい病害虫が発生しても生き残る種が発生することがわかった。また、「昔野菜」を作ることは生産者にとって”ものづくり”としての楽しさがあることがわかった。「昔野菜」は決して経済性のよい作物ではないが生産者が「農家」としてつくる喜びがある作物であることがわかった。「昔野菜の価値」としては F1 種に比べ内部留保率が高い作物であると考えられる。

今後の課題としては今回消費者側の「昔野菜」に対するインタビューを行うことができなかった。消費者側をインタビューすることによって「昔野菜」の課題である”市場性がない”という内容を明らかにしたいと考える。また、今回昔野菜の定義である「食文化との密接な関係性」も明らかにできていない。「食文化との密接な関係性」については現在四万十町十和にある昭和小学校にて「昔野菜」の栽培を子供たちが行っており、食育という観点からも考えて行きたいと考える。

参考文献

今どきの高いタネを買わなくても惜しみなく播ける おかみさんたちの昔野菜 (2007 年 品種特集号) --(好きだからやめられない「昔品種」)現代農業(86(2), 109-113, 2007-02) 森澤 宏夫